

## 5-3 言語の指導：コミュニケーション手段としての文字や言葉を使った活動

文字を知り、本が読めるようになることで、多くの知識を吸収することができます。しかし文字が読めても、内容を理解しなければ知識にはつながりません。また文字が書いても、文章になっていなければ伝達手段にはなりません。大人は、文字の読み書きが早くできることを子どもに期待しがちです。でもその前に、様々なお話を聞いて語彙を増やしたり、内容を理解したり、相手に分かるように言葉で伝えたりする経験が必要なのです。

### 絵本・紙芝居などを読み聞かせる

生まれて数ヶ月の子どもも、絵本を読み聞かせすると注目します。お話の内容そのものに関心を示すのはもっと先ですが、身の回りで見慣れたものを絵の中に見つけて楽しむことから、絵本の世界に入っていきます。子どもたちに誘いかけたり呼びかけたりする言葉や、繰り返しのリズムなどを楽しみながら、彼らは言葉の意味と絵とを結びつけてみるようになっていきます。3歳から4歳の頃は言葉に対する力も急速に発達します。ことばを耳から聞いて物語の世界を頭の中に思い描く力、想像力を育てていきたい時期です。親や教師が読んでくれる「声」とさし絵とを結びつけながら、想像の世界に入っていくのです。やがて子どもたちは文字を覚え、一人でも読めるようになっていきます。こうした言葉の発達にあわせて、幼児期に絵本や紙芝居の読み聞かせを通して想像力を培うことは、その後の読書はもちろん、知的な関心にあふれた豊かな言語生活の基礎を培うことでもあるといえるでしょう。

#### 教育的意義

- ・ 絵本や紙芝居を読んでもらうことを通して、言葉のリズムや響きを楽しみ、言葉に対する感覚を養いながら、言葉の意味を理解していく。
- ・ 絵本や紙芝居の言葉に接することで、ものごとや自分の思いを表しながらコミュニケーションを支える語彙を増やしていく。
- ・ 絵を手がかりにしながら内容を理解していく過程で、言葉が描く物語やお話の世界を想像する力が育つ。
- ・ 様々な絵本や紙芝居に接することにより、身の回りの世界をとらえなおし、未知の世界へと、認識や視野を広げることができる。
- ・ 絵本や紙芝居を読んでもらったり、自分で見たりすることを通して、人やものとの関わりに気づいていく。
- ・ 絵本の中から遊びを見つけ、遊びの世界を広げることができる。
- ・ 絵本や紙芝居が好きになることで文字に親しみ、文章を自分で読んで見ようとする意欲が湧き、将来の学校教育に無理なく取り組む力が育っていく。

## 絵本・紙芝居などに親しむ



絵本を集めた「絵本コーナー」です。

最下段の本は背の部分（本のタイトルだけ）を見せて重ねて並べていますが、上段は、絵本の表紙が見えるように並べてあります。

表紙が子どもたちに見えるように並べることで、子どもたちへの誘いかけになります。

子どもたちを集めて絵本の読み聞かせをしています。

読み手は、子どもたちに絵がよく見えるように、絵本を身体の高さに掲げ、子どもたちに向けて持って読んでいます。

お友達といっしょに絵本を見えています。

まだ文字は読めませんが、絵を眺めながらお話を想像していきます。

何度も読み聞かせしてもらった本なら、いつのまにかそのまま覚えてしまって、まるで文字を読んでいるかのように暗誦しながらページをめくることもあります。

二人の男の子が友だちといっしょに楽しそうに絵本を見えています。

そこへ誘われるように別の男の子がやってきて絵本を広げました。

絵本のあるところ、友だちの輪が広がっていきます。

実習生が子どもたちに紙芝居を見せています。

一枚ずつ絵を抜きながら進んでいく話に、子どもたちはひきつけられています。

時には、手作りの紙芝居を見せることもあります。

自分が描いた絵を、ちょうど紙芝居のように見せて、お話を作り出そうとしています。

絵本や紙芝居を読む体験が想像力を育て、それが創造性にもつながっていきます。

先生を真似て友だちに向かって、読み聞かせをしています。

机に青いクロスをかけて、まるでお話のステージのようです。

## 留意点

- ・ 小さな子どもたちに読み聞かせをしてあげるときは、絵本も遊びの一つと考え、大人と子どもがともに絵とことばを楽しみ合うようにすることが大切です。
- ・ 読み聞かせをするときは、ゆっくりと絵を見せながら読んであげるようにします。時にはひざの上に子どもを乗せてあげたり、教師とふれ合う位に身近に集めて読んであげたりするのもよいでしょう。
- ・ 教師は絵本の方ばかりを見るのではなく、むしろなるべく子どもたちのほうに顔を向けて、話しかけるように読んであげるとよいでしょう。書いてあるとおりに読むだけでなく、「きれいね」「どうしてだろう」などと言葉をはさんで子どもたちに誘いかけるようにするのもよいでしょう。聞き手の子どもに合わせて言葉を言いかえてあげてもかまいません。
- ・ 幼児が興味をもった絵本を何度でも読んであげましょう。そうすることで、絵本の文章を暗記して、文字の連なりを意味あるものとしてとらえることができ、やがては意味を理解しながら文字を読むようになるでしょう。

## 活動の応用またはヒント

- ・ すぐれた絵本は、絵の入れ方もよく工夫されています。絵のなかにさまざまな発見があったり、話の展開を想像しやすくさせる工夫があったりします。教師自身がよく絵を見て読む練習をし、ページのめくりかたも絵に合わせて工夫するとよいでしょう。
- ・ 物語の展開を想像させたいときには、子どもたちの表情を見ながら、ゆっくりとページをめくります。緊迫した場面などは素早くめくると効果的です。
- ・ 紙芝居では、緩急だけでなく、絵の一部を隠すようにわざと途中でとめることで効果が上がるように作られたページもあります。読み聞かせをする教師自身が、そのページの絵と言葉、次のページの絵と言葉をよく読み味わい、読み方をいろいろと工夫してあげると、子どもたちがよるこぶ読み聞かせになります。
- ・ 絵本コーナーでは、本の置き方を工夫します。スペースにもよりますが、できるだけ本の表紙が見えるように並べておくと、子どもたちが手にとって読んでみたくなるでしょう。
- ・ 季節の変化を知らせていたり、行事への関心を高めていたりするために、意図的に絵本棚に入れておくのもよいでしょう。

## 文字にふれる

子どもが生活する環境には、多くの文字や記号が存在します。文字との関わりは、外から強制されることなく、日常の生活のなかで提示されている文字や記号に自分から関心を示し、興味をもって関わることから始まります。それらの文字や記号に対する子どもの興味・関心を育むためには、子どもにとって意味ある環境を、大人がどのように構成していくかが重要になります。

入園してきた子どもたちは、直接自分の生活と関わりのある文字環境に出会います。靴箱やタオルかけ、ロッカー、棚、引き出しなど、子どもが日々使う場所に、一人一人の名前が書かれています。子どもは名前の文字を、ひとつの記号としてとらえて覚えていきます。しかし文字への興味・関心は、同じ年齢であっても偏<sup>かたよ</sup>りがあり、個人差のある領域です。文字に関心をもたない子どももいることから、教師は、親しみやすい動物や花のマークなどをつけて、文字を提示していくこともあります。

### 教育的意義

- ・ 子どもの生活する環境のなかにさまざまな文字表示を構成することにより、子どもの文字や記号に対する興味・関心を引き出す。
- ・ 子どもの親しみやすいマークや絵と一緒に文字環境を提示することで、文字が意味することを理解していく。
- ・ 自分を表す姓名の表示から文字に関心をもち。
- ・ 教師が子ども一人一人に対して手作りの誕生カードを作ったり、メッセージを書いてあげたりすることで、文字への関心が深まる。
- ・ 教師が子どもの描いた絵や作品に名前を書いたり、解説を書き入れたりして目の前で文字を提示していくことで、子どもは、自分でも文字に取り組んでみようとする気持ちをもつようになる。
- ・ 「かるた」などの伝統的な遊びを通して、文字に対する興味・関心をもち。
- ・ 五十音（あいうえお）やアルファベット（ABC）の表や絵本などを身近に置き、いつでも見たり触ったりできるようにしておくことで、子どもの文字に対する興味や関心が高められる。

## 文字にふれる環境



一人一人の棚のなかに、粘土板、自由画帳、粘土、クレパス、糊をどのように片づけるか、しまいね方を教師が絵を描いて示しています。

砂場で使う遊具を決められたかごに分類して片づけられるように、文字とともに一つの遊具の絵が描かれています。



それぞれの靴箱に、名前が書かれています。

名前の前には動物や果物など親しみやすい絵（マーク）が、貼られています。

このマークはその子だけのマークで、他の場所でも共通のものが使われます。

広告紙と新聞紙を分類してしまえるよう、はっきりとした文字で書いてあります。

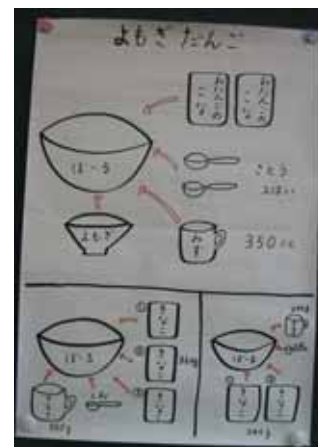


クラスやトイレなどは、文字だけではなく、絵と合わせて分かりやすく表しています。



教師は子どもたちに伝えたいことを紙に書いて、子どもたちの作った札に貼りつけて知らせます。

お団子作りの材料や手順を、文字と絵で書いて示しています。



教師は、子どもの描いた絵や作品に丁寧に名前を書きます。

子どもは、自分の名前を書いてくれる教師の手元を注意深く見えています。

他の人が文字を書いているのを身近で見ながら、やがて自分で文字を書いてみようという気持ちが生まれてきます。

## 留意点

- ・ 文字は教え込むのではなく、遊びを中心とした生活を通して、幼児自身が環境のなかから自分で選び取って取り入れていく過程を大切にしましょう。
- ・ 環境としての文字提示であることから、文字は正しく、美しく書くように心がけましょう。
- ・ 補助的なマークや絵については、幼児の教育的環境としてふさわしいものを取り入れるようにしていきましょう。
- ・ 雑然とした環境では、文字環境が埋もれてしまい、幼児の目にとまりにくくなります。室内の環境を常に整えて、文字環境が目につきやすいようにしておきましょう。
- ・ 文字が多いことがいい環境とは言えません。子どもの発達に適した環境を用意するようにしていきましょう。
- ・ 幼児の描いた絵や作品については、一人一人と丁寧にかかわりながら名前や解説を書いてあげるようにします。このようなかかわり方は、幼児との信頼関係を深めるとともに、幼児が「肯定的に受け入れられている」ことを実感し、さらに自己実現を図ろうとするようになる大切なかかわり方です。
- ・ 文字が読めない子どもが自信をなくさないように、発達にふさわしい文字環境の取りあげ方に配慮しましょう。

## 活動の応用またはヒント

- ・ 絵本のカバーを壁にはっておいて、文字環境として示していくことで、「こんなに楽しい絵本がありますよ。読んでみてね」という、メッセージを送ることが出来ます。
- ・ 年齢によっては、歌詞を大きな紙に書いて保育室に貼っておきましょう。歌詞を覚えていく過程で、自然に文字を覚えていく手がかりになります。
- ・ みんなでひとつの活動に取り組むときには、材料や手順を分かりやすく図式にして大きな紙に書いて貼っておくことで、活動の流れが全体に伝わりやすくなります。
- ・ 園内の樹木や、花壇に植えてある植物などの名前を書いておくことにより、園の自然環境に対して興味や関心を向けていくきっかけになります。
- ・ 「かるた」は少人数で取り組む遊びですが、字が読めなくても絵を見て取りながら楽しく遊べるゲームです。このゲームを通して、文字に興味をもった子どもはどんどん字を覚えていきます。多くの人数で遊ぶ場合には、グループに分けて、その数だけ同じかるたを用意すると、みんなで楽しく遊べます。



## 文字を書く

子どもは、家庭や地域の様々な生活場面で、文字や記号、看板などを目にします。それらを読んでいる大人の姿を見たり、大人と一緒に読んだり、標識を見て話したりするなどの経験を通して、次第に文字や言葉に興味をもつようになります。また、大人が新聞や本を読んだり、手紙を書いたりしている姿を見ることで、文字のもつ意味や役割を自然に理解し、大人の真似をして文字や記号を使うことに興味をもつようになります。ちゃんとした文字にはなっていないくても、かなり早い時期から文字らしい形を書いたりすることもあります。年齢が進むにつれて、読み方を教師や友達に聞いたりする姿が多く見られるようになってきます。教師は、子どもが生活のなかでふれる文字を意味を伝えるものとして意識させ、日頃の保育のなかで文字を使う喜びや伝える喜びを味わわせるようにしています。

### 教育的意義

- ・ 家庭や地域の生活のなかで、様々な文字や記号、看板などにふれ、記号としての文字の果たす役割や意味を理解するようになる。
- ・ 生活や遊びのなかで文字に興味をもち、自分なりに文字を読んだり書いたりして、表現する喜びを味わう。
- ・ 生活や遊びのなかで、文字を使って相手に伝える楽しさや伝わる喜びを知る。
- ・ 言葉遊びや文字を使った遊びなどを通して、表現の仕方の違いや面白さに気づいたり、文字を使う楽しさを味わったりしながら、言葉や文字が意味することを理解していく。
- ・ 自分の思ったことや考えたこと、伝えたいことなどを、短い文章にして文字を使って表わすことができるようになる。

## 文字を書いてみる

まだ形にはなっていない文字で、3歳児が書いたお手紙です。

自分なりに書く喜びを味わい、文字らしきものを使って伝えようとしています。

教師は、子どもが表したいことや伝えたい気持ちを十分に受け止めるようにします。

電車ごっこをしている子どもが、電車のマークを書いています。

帽子のマークは「JR」。

子どもが身近な生活のなかでふれる「JR」の記号の意味を知り、遊びのなかで使っているのです。



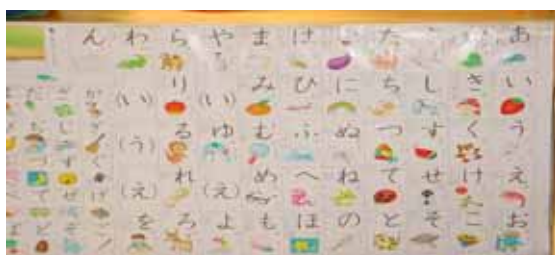
電車には「東京」と行き先が書いてあります。

遊びのなかで漢字を使っています。

ケーキ屋さんごっこが始まります。

みんなに知らせようと、友達と相談しながら看板を書き始めました。

積み木を持ってきて、書いた看板を貼り出しました。



子どもたちがいつでも見て書けるように、五十音(あいうえお)表が壁に貼ってあります。

5歳児がカルタを作りました。

カルタは、「読み札」の言葉と、「絵札」  
(1文字だけ書かれている)の文字をあ  
わせて遊びます。

お正月になると大人も子ども一緒にカ  
ルタをします。



自分たちで作ったカルタをして遊んで  
います。

読み手の子どもは、文字の書かれた「読  
み札」を読んでいます。

子どもたちは「絵札」を競って取り、遊  
びながら文字に親しんでいきます。

グループのメンバーの名前を書いた表です。

教師は、生活のなかで必要な場面をとらえて  
名前を書く機会を作り、文字の果たす役割や  
必要性を知らせていくようにします

当番カードをめくり、「あしたのお当番は、  
ゆりちゃんです」とみんなに伝えていると  
ころです。

当番カードには、名前が書いてあります。

## 留意点

- ・ 子どもは、はじめは形にならない文字や、鏡文字（左右を反対に書く）を書きます。これは、文字を表現やコミュニケーションの手段として使いはじめた姿です。すぐに正しい文字を教えるのではなく、文字で伝えたい気持ちを十分に受けとめます。
- ・ 遊びのなかで、看板を書いたり、手紙を書いたりして文字を取り入れる場面をとらえ、遊びが楽しくなるように援助していきます。はじめは教師が書いてみせますが、次第に自分で書くようになります。
- ・ 子どもが「書いて」「どうやって書くの?」「教えて」などと援助を求めてきたときには、教師は正しい文字で書いて、ていねいに教えていきましょう。
- ・ 鉛筆だけでなく、筆圧が弱くても書きやすいマジックやクレパスを用意したり、いろいろな種類や大きさの紙を置いたりして、用具の準備や数に配慮しましょう。
- ・ 落ち着いて書ける場所を作ったり、机や椅子を使ったりし、集中して取り組める場ができるように援助します。
- ・ 文字の「じょうず」「へた」ではなく、書いてみようとする気持ちが大切であることを子どもに知らせていきましょう。

## 活動の応用またはヒント

- ・ 絵本や紙芝居の台紙を作っておいて、子どもが絵を描きこんで物語を考えたり、その物語についての言葉を教師が書き込みながら、子ども自身の絵本作りや紙芝居作りに発展させて楽しむこともできます。
- ・ 教師は、遊びのなかで文字を必要とするようなこと（例：レストランのメニュー、お店屋の品物・値段など）を提示して、文字を書くことにつなげていきましょう。
- ・ いつでも使ってよい紙を置いておきましょう。劇の配役をメモしたり、縄跳びをどのくらい跳べるようになったかなどを、記録したりするために使うようにもなります。
- ・ お誕生日会や発表会などの案内状を子ども自身が書いて、家庭や地域の方に送ると喜ばれるでしょう。
- ・ 自分の名前が書けるようになった子どもには、自分の描いた絵や作品に、自分の名前を書き込むように働きかけるのもよいでしょう。

## 5-4 数量の指導：子どもの生活に根ざした数量の活動

幼児期の子どもは、物を並べたり・数えたりすることが大好きです。しかし 100 まで数を唱えられて得意になっていた幼児が、おやつのクッキーをみんなに 5 つずつ配ることに戸惑う姿があるように、本当の意味で数を理解できているわけではありません。子どもの数概念は、5 歳半以降に獲得すると言われていています。物の量をたくさん・少しと感じることから始まって、量から数へと分化していく過程に幼稚園時代があります。

### 生活と遊びのなかの数量

幼稚園の日常生活のなかには、子どもが数量にかかわる機会がたくさん埋めこまれています。お便り帳や園からの手紙を友達に配る（1対1対応）・おはじきを色別に分ける（分類）・お団子を大きさの順に並べる（順列）・空箱を大小に分けて片付ける（大小の分類）、背の高さの順に並ぶ（高低の順列）など、様々な行為のなかで、どちらが多い・少ない、どちらが大きい・小さいと比べる目を養いながら、いくつ足りない・どれだけ小さいなどと子どもは数量について考え、数量概念を発達させていきます。シンボルである数字は、多くの数量を考えていくなかで必要となり、子どもは自然に文字にも興味を持つようになります。このように幼稚園の生活と遊びのなかで、子どもはたくさん数量について出会い、考えています。教師は園生活のなかで出会う数量経験に目を向けて、その場面・場面で子どもが数量に出会い、関心をもつように環境を整え、より深く考えることができるように援助していきます。

#### 教育的意義

- ・ 自発的な活動のなかで、子ども自身が多くの要素を比較しながら数量の概念を発達させる。
- ・ 物とのかかわりを通して、子ども自身が必要な数量を考えるようになる。
- ・ 個々の子どもの発達に応じて理解している数量を用いながら、主体的に活動できる。
- ・ 物事を順序立てながら遊びを組み立てたり、遊びに応じて用具を使い分けたりすることで、論理的思考が促される。
- ・ 様々な場面で数量を考えていくなかで、実数と数字を関係づけ、数字の意味することを理解していく。
- ・ 空間や時間（積み木の片付け・ボールのスピードなど）にかかわる活動を通して、数学の基礎を形成する。